

A 語句の意味と読み

(1) 必要がない。役に立たない。 / 「要」＝入り用。都での自分を無用の者と見たということ

(2) (そうではないのに) 自分でそう思い込む。 / 「なす」＝意識してそうする。旅立ちの動機になる語

(3) 蜘蛛の足のよう、四方八方へ幾筋にも分かれているようす。 / 川が分流している地形。これが地名「八橋」の由来につながる

(4) 炊いた米を干した、旅の携帯用の保存食。水などでもどして食べる。 / 乾いているからこそ、涙で「ほとぶ」という表現が生きる

(5) 水気を含んでふやける。ふくれる。 / 乾飯が涙でふやけるほど泣いた、という誇張のきいた表現

B 文法

(6) 存続(完了)の助動詞「り」の連体形。「橋を八つ渡してある」の意。 / 「渡せ」は四段動詞「渡す」。※「り」の接続を「四段の已然形」と説明する教科書と「四段の命令形」と説明する教科書があるので、お使いの教科書の説明に合わせる

(7) 力行変格活用の動詞「来(く)」の連用形「き」+完了の助動詞「ぬ」の連体形「ぬる」。 / 下の「旅」を修飾するので連体形。「来(く)」の活用＝こ・き・く・くる・くれ・こ

(8) 意味を強める副助詞(強意の「し」)。訳には直接表れない。 / 直前が格助詞「を」。過去の助動詞「き」の連体形「し」ではない

(9) 係助詞「ぞ」を受けて連体形で結ぶ、係り結び(の法則)によるため。 / ぞ・なむ・や・か→連体形 / こそ→已然形

(10) 打消の助動詞「ず」の連体形。 / 下の「なり」が断定の助動詞で、体言・連体形に接続するから。続く「けり」は詠嘆(～だなあ)

C 主語・指す内容・敬意

(11) ある人(旅を共にしている同行者の一人)。 / 「ある人のいはく」に注目。求められて詠んだのは男

(12) 修行者の言葉。 / 「といふを見れば、見し人なりけり」＝言うのを見ると都で見知った人だった、という流れ

(13) 話し手である修行者から、男(一行)に対する敬意。 / 「います」は尊敬語なので、敬われるのは動作をする人＝男。会話文の中なので、敬っているのは作者ではなく話し手の修行者

(14) 「都鳥」という、「都」の字を持った鳥の名。 / 都の名を負う鳥なら都のことを知っていよう、という理屈でよびかけている

D 口語訳

(15) (涙が落ちて) 乾飯がふやけてしまった。 / 「に」＝完了「ぬ」の連用形。「けり」はここでは地の文なので過去(～てしまった)。和歌の文末の「けり」は詠嘆になることが多い(⑬参照)

(16) 思いがけない(つらい) 目にあうことだ。 / 「すずるなり」＝思いがけない / 「めを見る」＝経験する

(17) このような(暗く心細い) 道を、どうしていらっしゃるのですか。 / 「かかる」＝このような、「いかでか」＝どうして～か、「います」＝いらっしゃる

(18) (あの人に) 会えないのだなあ。 / 「ぬ」＝打消 / 「なり」＝断定 / 和歌の文末の「けり」＝詠嘆。「～ないのだなあ」と結ぶ

E 内容・記述

(19) 川の流れが蜘蛛の足のように幾筋にも分かれていて、そこに橋を八つ渡してあったから。／②「蜘蛛手」の地形が前提。地形→橋の数→地名、の順で書く

(20) 衣が着慣れてやわらかくなる意の「萎る」と、長年連れ添って慣れ親しむ意の「馴る」。／「から衣」の縁で「萎る」、「つま(妻)」の縁で「馴る」。一語に二つの意味を重ねるので掛詞

(21) 都を離れた心細さと望郷の思い(十四字)／直前の「限りなく遠くも来にけるかな」が手がかり。「心細さ」「望郷」の二要素を入れる

(22) 都に残してきた恋しい人が、無事でいるかいないかということ。／歌の下句「わが思ふ人はありやなしや」がそのまま答え。直後に「舟こぞりて泣きにけり」とある

F 文学史・修辞

(23) 折句(おりく)／「からころも／きつつなれにし／つましあれば／はるばるきぬる／たびをしぞ思ふ」の頭を続けて読む

(24) かきつばた／沢に咲いていた花の名。各句の頭は「か・き・つ・は(ば)・た」

(25) 縁語(えんご)／なお「から衣」自体を、「着る」を導く枕詞とする教科書と、序詞的な表現とする教科書があるので、お使いの教科書の説明に合わせる

(26) 地名の「宇津(の山)」と、「現=現実」の意味。／歌の上句「駿河なる宇津の山辺の」の「宇津」に「うつつ」の音を重ねている。歌意は「現実にも夢にもあの人に会えないことだなあ」

(27) 歌物語(うたものがたり)／ほかに『大和物語』『平中物語』などがある

(28) 在原業平(ありわらのなりひら)／六歌仙・三十六歌仙の一人。あくまで「モデルとされる」人物で、作品全体が業平の事績そのものというわけではない

【現代語訳(全文)】

昔、ある男がいた。その男は、わが身を必要のない(役に立たない)ものだと思い込んで、都にはいるまい、東国の方に住むのによい国を求めて行こうと思って出かけて行った。もともとから友として人、一人二人と連れ立って行った。道を知っている人もいなくて、迷いながら行った。

三河の国の八橋という所に着いた。そこを八橋といったのは、流れる川が蜘蛛の足のように幾筋にも分かれているので、橋を八つ渡してあることによって、八橋といったのである。その沢のほとりの木の陰に(馬から)下りて座って、乾飯を食べた。その沢にかきつばたがたいそう美しく咲いていた。それを見て、ある人が言うことには、「『かきつばた』という五文字を各句の初めに置いて、旅の心を詠め」と言ったので、(男が)詠んだ歌。

唐衣を着慣れるように、慣れ親しんだ妻が都にいますので、はるばると来てしまったこの旅を、しみじみと思うことだ

と詠んだので、一行の人々はみな、乾飯の上に涙を落として、その乾飯がふやけてしまった。

さらにどんどん行って、駿河の国に着いた。宇津の山まで来て、自分が分け入ろうとする道は、たいそう暗く細いうえに、葛や楓が茂り、なんとなく心細く、思いがけないつらい目にあうことだと思っていると、修行者に会った。「このような道を、どうしていらっしゃるのですか」と言うのを見ると、(都で)見知った人であった。都にいる、あの人のもとへと思って、手紙を書いて(修行者に)託す。

駿河にある宇津の山辺の、その「うつ」ではないが、現実にも、また夢の中でも、あなたに会えないことだなあ

さらにどんどん行って、武蔵の国と下総の国との間に、たいそう大きな川がある。それをすみだ河という。その川のほとりに一行が集まって座って、都のことを思いやると、この上なく遠くまで来てしまったものだなあと、互いに嘆き合っていると、渡し守が、「早く舟に乗れ、日も暮れてしまう」と言うので、舟に乗って渡ろうとするが、人々はみななんとなく物悲しくて、都に思う人がいないわけでもない。ちょうどそのとき、白い鳥で、くちばしと脚とが赤い、鳴くらしいの大きさの鳥が、水の上で遊びながら魚を食べている。都では見かけない鳥なので、人々はみな見知らない。渡し守に尋ねたところ、「これが都鳥だ」